

**いばらきネットモニター  
都市農村交流を通じた農村地域の活性化に関するアンケート**

**1 調査の概要**

(1) 調査形態

調査時期：令和元年12月2日（月）から令和元年12月15日（日）まで

調査方法：インターネット（アンケート専用フォームへの入力）による回答

いばらきネットモニター数 664名

回収率：46.4%（回収数308名）

回答者の属性：（百分率表示は小数点以下第二位を四捨五入しているため、個々の比率の合計は100%にならない場合がある）

		人数（人）	比率（%）
全体		308	100.0
性別	男性	160	51.9
	女性	148	48.1
地域別	県北	32	10.4
	県央	102	33.1
	鹿行	15	4.9
	県南	95	30.8
	県西	31	10.1
	県外	33	10.7
年齢別	10歳代	2	0.6
	20歳代	14	4.5
	30歳代	57	18.5
	40歳代	74	24.0
	50歳代	71	23.1
	60歳代	40	13.0
	70歳以上	50	16.2
職業別	自営業	26	8.4
	会社員	102	33.1
	団体職員	7	2.3
	公務員	9	2.9
	主婦・主夫	74	24.0
	学生	6	1.9
	無職	56	18.2
	その他	28	9.1

(2) 調査目的

都市農村交流を通じた農村地域の交流人口の拡大や関係人口の創出に向けた事業を行うにあたっての参考とすることを目的とします。

担当課：茨城県農林水産部農地局農村計画課（農村活性化グループ）

電話：029-301-4264

E-mail:nokan4@pref.ibaraki.lg.jp

## 2 調査結果の概要と考察

【問1】日本には緑豊かな里山や田畑が広がっていますが、こうした地域において、自然・文化・農林漁業とのふれあいや人々との交流を楽しむことを「都市農村交流」（グリーン・ツーリズム）といいます。次にあげた都市農村交流の例のうち、あなたがこれまでに体験したことがあるものを、すべて選んでください。

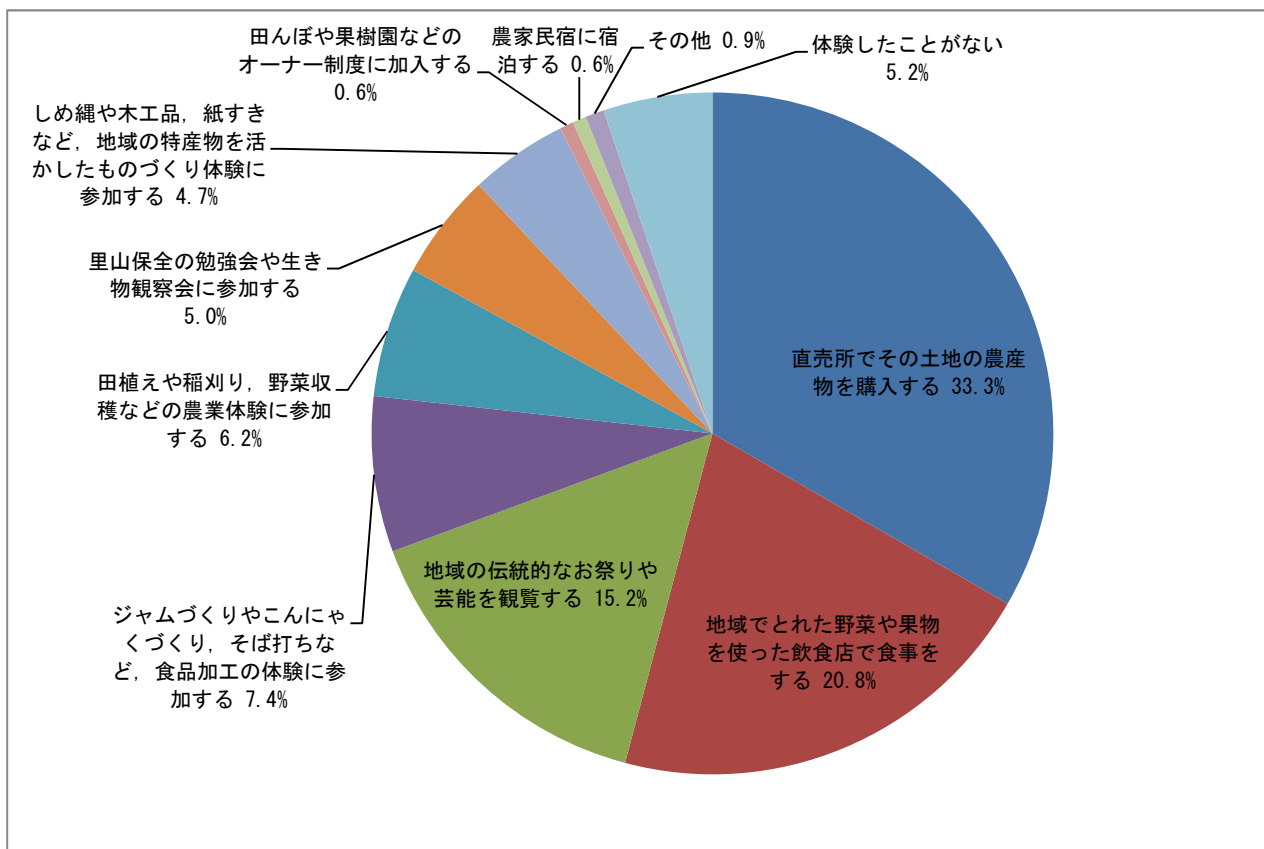


図1 体験したことがある都市農村交流の内容

- ◆直売所での買い物や地産地消の飲食店での飲食、地域のお祭りや芸能の観覧など、日帰りのできるものや予約の不要なものは、体験率が高い結果となった。
- ◆一方、農業体験や加工・ものづくり体験などは、体験日時や定員が決まっていたり、準備が必要な場合もあり、事前に実施することを知ったうえで参加することが多いことから、体験率が下がったと考えられる。
- ◆オーナー制度や農家民宿など、地域への関わり合いが高いものや滞在型の体験は、さらに少ない結果となった。
- ◆「その他」としては、畑を借りて農業に取り組む、地域の民話の採集、地域食材での料理会、などがあげられた。
- ◆本問は複数回答可としたところ、回答数は 774 あり、「体験したことがない」と回答した人を除くと、一人当たり平均約 2.4 個の項目を体験していることが分かった。

【問2】（問1で何らかの体験をしたことがある方）あなたは、その体験ができることをどのようにして知りましたか。次の中からあてはまるものをすべて選んでください。

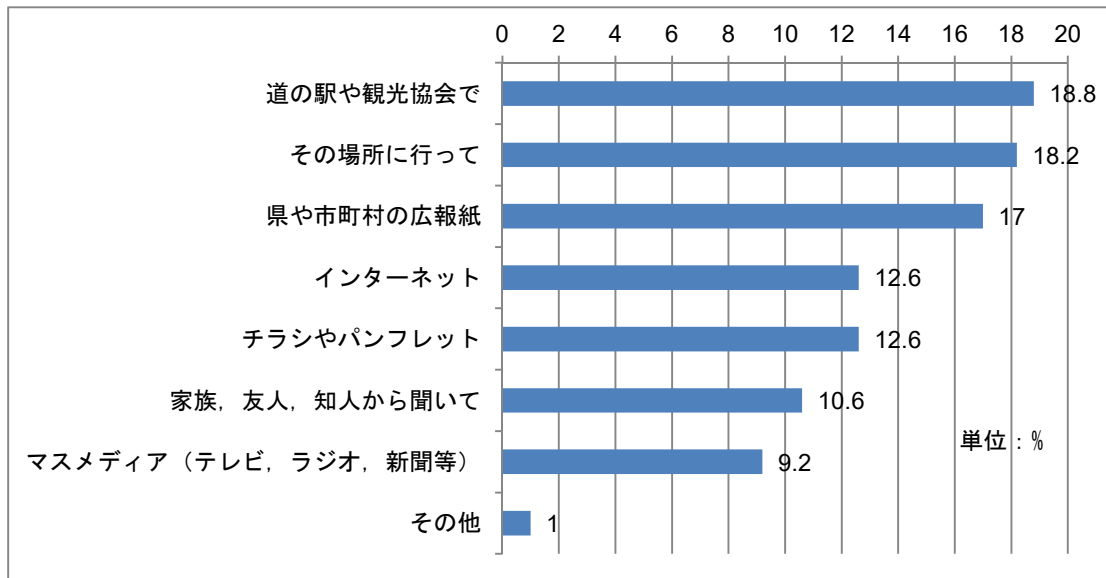


図 2-1 体験情報を入手した手段

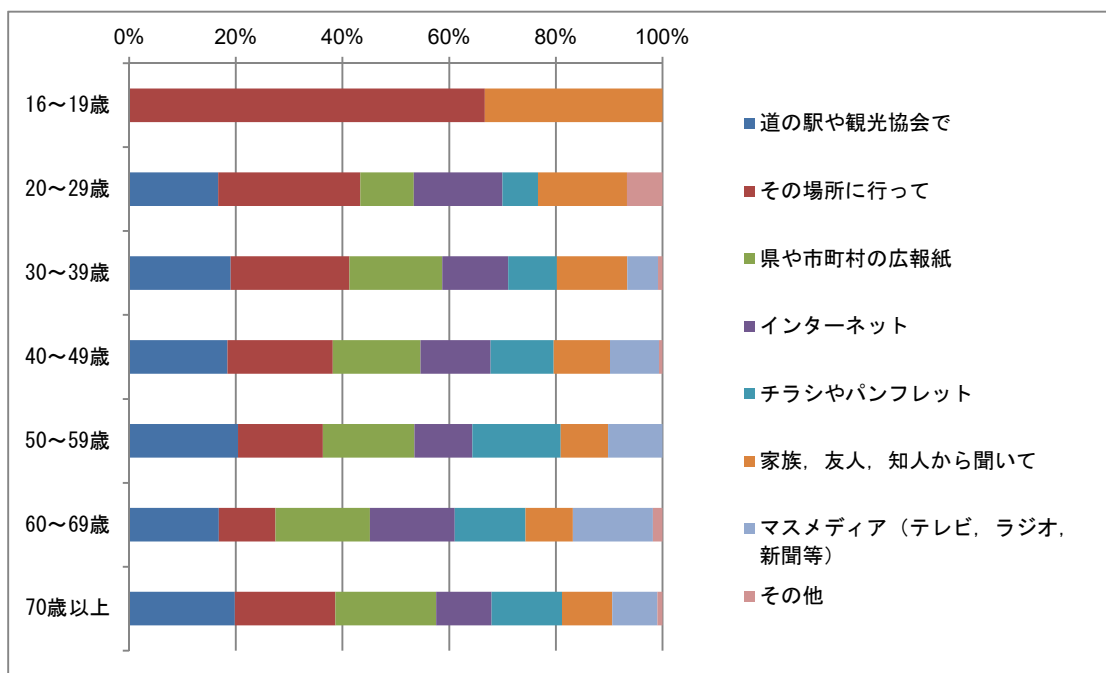


図 2-2 年齢別状況

- ◆ 「道の駅や観光協会」と答えた人が最も多く、道の駅や観光協会の情報発信機能が高いことが明らかになった（図 2-1）。
- ◆ 次に多かったのが「その場所に行って」という回答であり、このことから、事前の情報がなくても現地で関心を持ったものを体験していることが考えられる。
- ◆ また、30代より上の世代では「県や市町村の広報紙から知った」という回答も多かったことから、広報紙が事前の情報周知手段として有用であると考えられる（図 2-2）。
- ◆ 「その他」としては、職場の案内、学校の授業や行事、などの回答があげられた。

【問3】農業・農村は、食糧を供給するだけでなく、国土の保全や水源の涵養、文化の継承、といった多面的な機能を有しています。

こうした農業・農村の多面的な機能の保全について、あなたはどのように考えますか。次の中からあてはまるものを一つ選んでください。

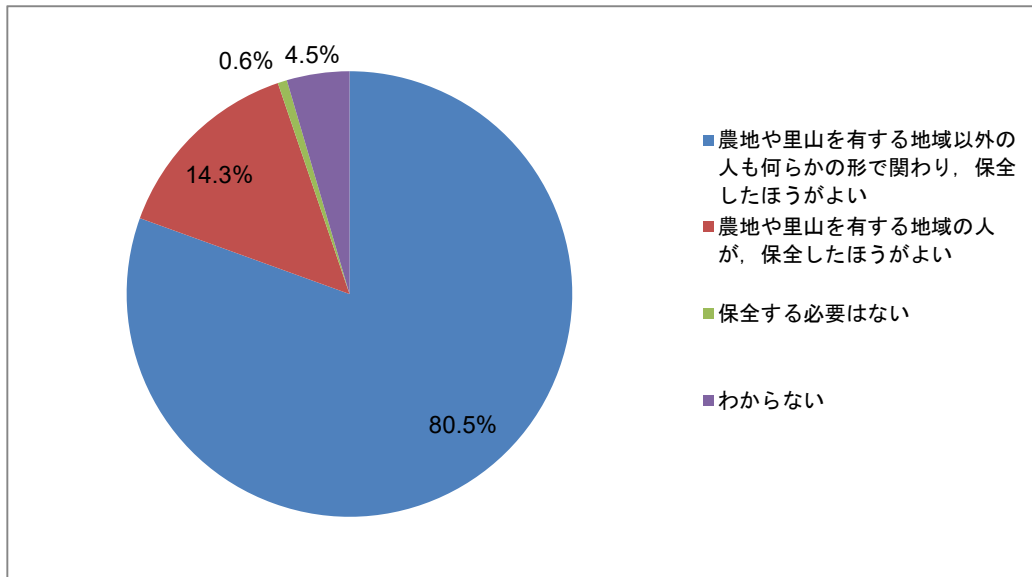


図 3-1 多面的機能の保全に対する考え

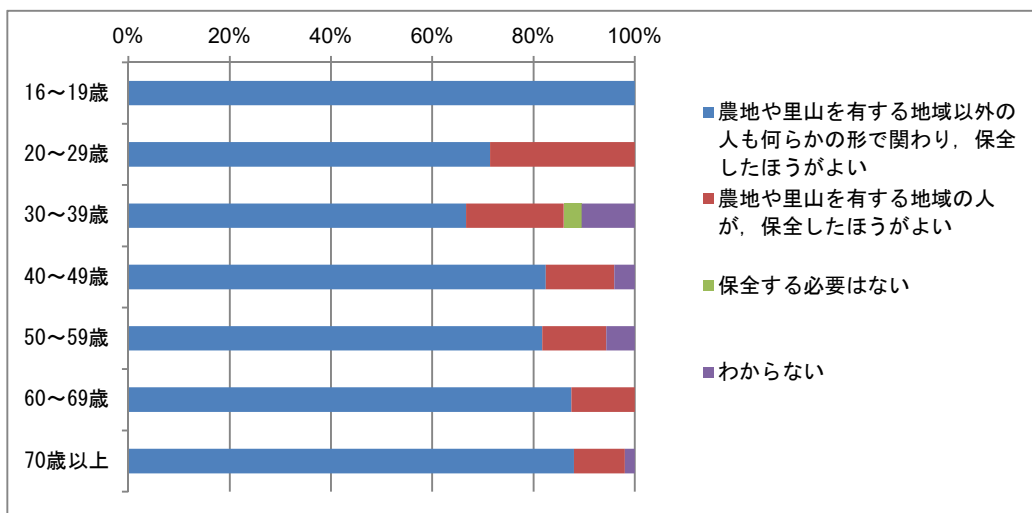


図 3-2 年齢別状況

表 1 「農地や里山を有する地域以外の人でも何らかの形で関わり、保全したほうがよい」と答えた人の地域別状況

県北	71.9%
県央	79.4%
鹿行	73.3%
県南	86.3%
県西	77.4%
県外	81.8%

- ◆農業・農村の多面的機能に関する考えを尋ねたところ、回答者の約8割が「農地や里山を有する地域以外の人でも何らかの形で関わり、保全したほうがよい」と回答した（図3-1）。
- ◆年齢別にみると、20代から30代において、「農地や里山を有する地域の人が保全したほうがよい」と回答した割合が高くなった（図3-2）。
- ◆「地域以外の人でも何らかの形で関わり、保全したほうがよい」と答えた人の地域別状況を見ると、県南地域と県外の回答者が8割を超えた一方、県北地域では約7割にとどまり、地域間で考えに差がみられることが明らかになった（表1）。

【問4】農村部では、農家の減少や高齢化が進み、多面的機能の保全に影響が出ている地域もあります。そこで、こうした地域を支援するため、地域外の方が関わるができる次のような制度があった場合、あなたが協力してもよいと思うものはありますか。次の中からあてはまるものをすべて選んでください。

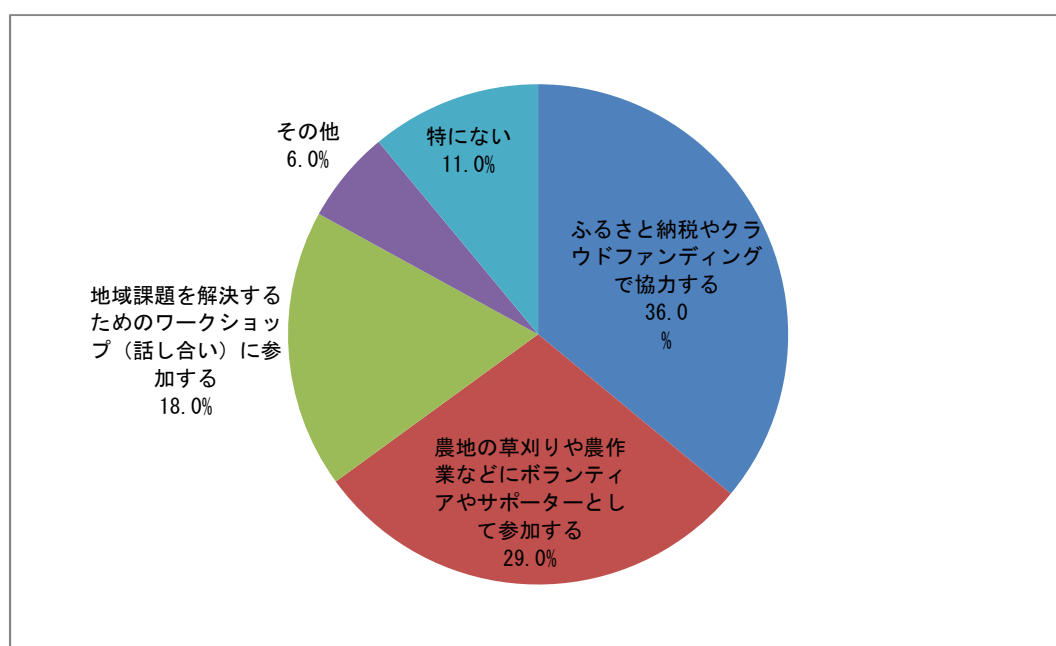


図4-1 多面的機能の保全に関して協力してもよいと思うもの

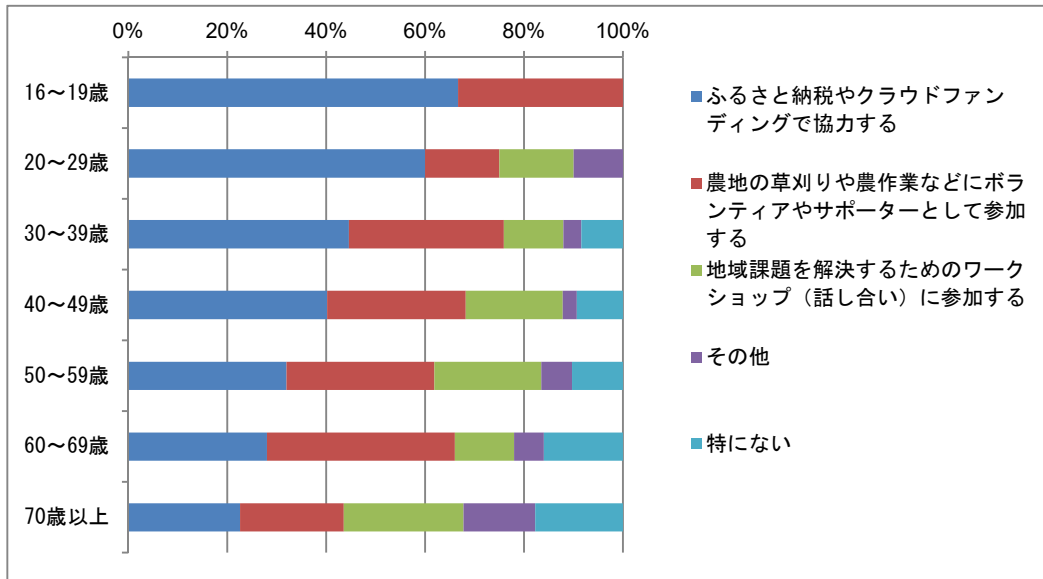


図 4-2 年齢別状況

- ◆最も多かったのが、ふるさと納税やクラウドファンディングといった金銭面からの協力で、全体の 36.0%であった (図 4-1)。これを年齢別にみると、若い世代ほど金銭面からの協力への関心が高い傾向にあることが明らかになった (図 4-2)。
- ◆「その他」としてあげられた協力方法には、地域の農産物などの購入や、農地を活用して農作物を育てる、などがあげられた。
- ◆「ボランティアやサポーターとして協力したいが年齢的に難しい」といった意見も複数みられた。

【問5】(問4で「ボランティアやサポーターとして参加する」と答えた人) あなたは、農地の草刈りや農作業などのボランティアやサポーターとして、どのくらいの頻度で参加してみたいですか。次の中から一つ選んでください。

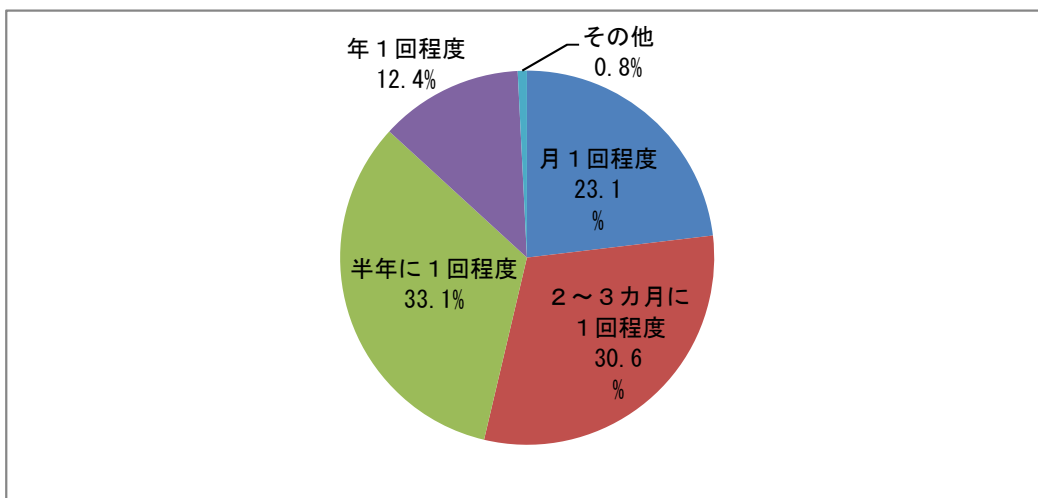


図 5-1 ボランティアやサポーターとして参加できる頻度

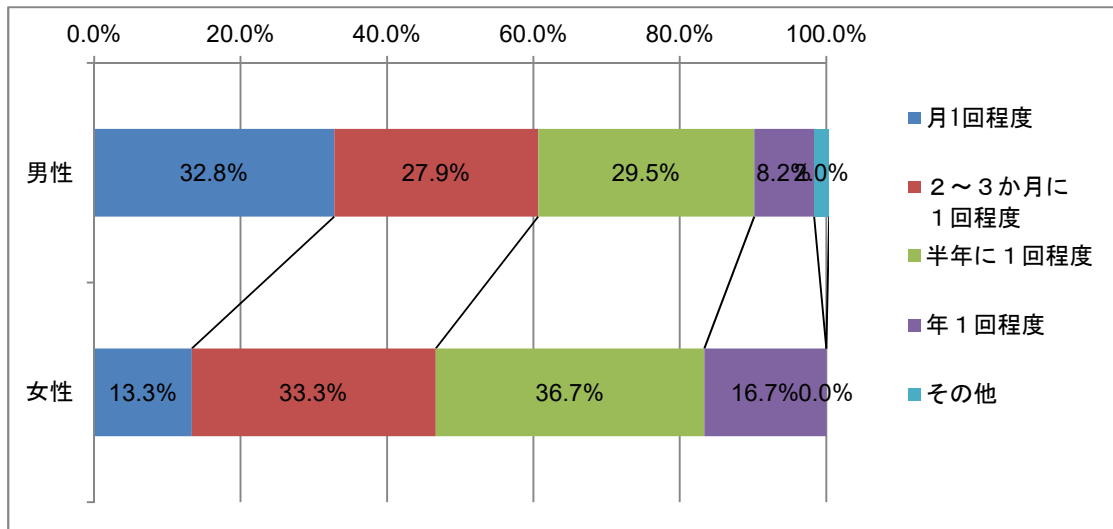


図5-2 男女別状況

- ◆ 「2～3か月に1回」と回答した人と「半年に1回程度」と回答した人がそれぞれ全体の3割超となった（図5-1）。
- ◆ 「月1回程度」と回答した人は23.1%おり、高い頻度で参加できる人が一定数いることが明らかになった。これを男女別でみると、「月1回程度」と回答した割合は、男性が32.8%、女性が13.3%となった。また、「年1回程度」と回答した割合は、男性が8.2%なのに対し、女性は16.7%となっており、女性よりも男性のほうが、高い頻度で参加できる傾向があることが明らかになった（図5-2）。

【問6】（問4で「ボランティアやサポーターとして参加する」と答えた人）あなたは、ボランティアやサポーター活動をするに当たり、あるとよいと思われることを、次の中からすべて選んでください。

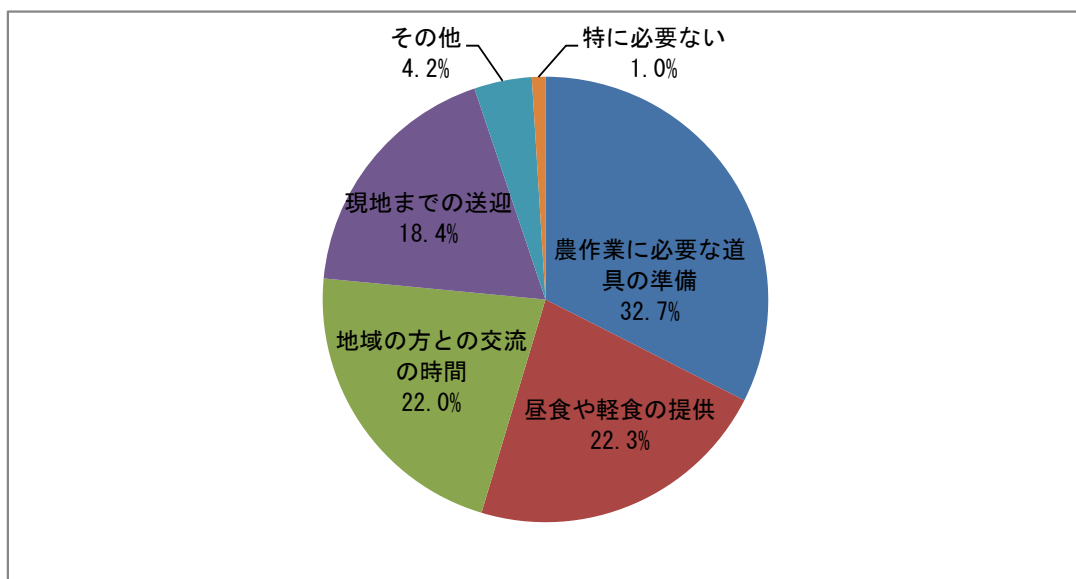


図6 活動に際してあるとよいと思われること

- ◆「農作業に必要な道具の準備」と答えた割合が最も高く、32.7%となった。続いて、「昼食や軽食の提供」、「地域の方との交流の時間」がそれぞれ22.3%となった(図6)。
- ◆「その他」としては、「収穫物の提供/購入」、「活動費の支給」、「地域とボランティアを仲介する人(組織)」、「現地駐車場」などがあげられた。また、「短い時間での参加」や「地域の方に負担させてまでの気遣いは必要ない」との意見もあった。

**【問7】都市農村交流や農業・農村の多面的機能の保全について、自由にご意見をお聞かせください(100字以内)。**

＜都市農村交流に関するもの＞

- ・おいしいものを食べられる道の駅の増加
- ・地域の農産物を購入することで応援したい
- ・都会的思考人や外国人旅行者の興味を引くようなイベントの実施
- ・ネットを介した交流 など

＜子どもの農業体験に関するもの＞

- ・学校教育の一部として、小学生から取り組んだほうがよい
- ・小中高生など若者を中心に都市農村交流を進めてほしい
- ・子どもの食育や自然体験なら活動参加の動機になる など

＜情報発信に関するもの＞

- ・グリーン・ツーリズムの情報を県内外に広く知れ渡るように積極的に発信すべき
- ・情報がなくて参加できない
- ・交流サイト、ポータルサイトの立ち上げ など

＜参加形態に関するもの＞

- ・ボランティアだけだと意欲がわからないので、ハイキングやキャンプ等と保全活動を組み合わせた参加体制
- ・旅行プランの一部としての参加
- ・家族で汗を流し、その土地の食べ物が食べられ名産品をお土産として持ち帰れるようなもの
- ・(サポーターのような) 制度があるとよい、あれば参加したい など

＜その他＞

- ・耕作放棄地の有効活用
- ・イベント的ではなく、知見やノウハウを有する人が日常的に活動できるような資金的な支援の仕組み
- ・サポーター等で参加した若い世代の人の移住につながるような制度の充実 など

その他多数のご意見をいただきました。(計169件)